

幼稚園における担任教諭の外国人の子どもへの支援

－担任教諭へのインタビュー調査から－

What is Feature of Support for Foreign Children in a Kindergarten?

相磯 友子¹

日本の幼稚園における担任教諭の外国人の子どもへの支援の全体像を捉えることを目的として、担任教諭1名にインタビュー調査を実施した。インタビューをスクリプトにおこし分析したところ、担任教諭は、外国人の子どもへの支援、外国人の子どもとクラスの子どものつなぐ支援、外国人の保護者への支援を行っており、それぞれの支援の特徴として「つなぐ・つながる支援」があることを見出した。

Key Words：幼稚園、担任教諭、外国人の子ども、つなぐ・つながる支援

I. はじめに

日本の保育所・幼稚園において外国人の子どもたちが増えており（日本保育協会, 2011；学校基本調査, 2012）、保育所・幼稚園では日々対応に追われる現状がある。

本研究は、幼稚園における担任教諭の外国人の子どもへの支援を「実践知」として整理し、その特徴を検討することを目的とする。本稿では「実践知」を田辺（2003）に従い、「実践の外部ではなく実践そのものに内在する知」と定義する。

本稿で「実践知」に着目するのは、これまで、保育所・幼稚園における外国人の子どもに関する研究が蓄積されているものの、保育所・幼稚園への「適応」や外国人の子どもの「言語習得」に焦点を当てられることが多かったためである。そして、これまで研究者が主眼としてこなかった「保育者・子ども間の、きめ細かな信頼関係の形成過程」(大場ら,1998)を捉えたいと考えたからである。

外国人の子どもと日々関わる保育所・幼稚園の先生がどのようなことに配慮し、どのようなことに気を配りながら外国人の子どもに支援を行っているのか、また、どのように外国人の子どもと信頼関係を築いているのか、先生方の実践の中から「実践知」をすくいとり、その「実践知」の中から、

今後の外国人の子どもへの支援に関するヒントを得たいと考える。

II. 方法

1. インタビューの概要

本研究では、幼稚園において外国人幼児を担当する担任教諭1名に半構造化インタビューを実施した。インタビューの概要は以下の通りである。

実施日：2011年7月22日

インタビュー時間：1時間32分

協力者：私立幼稚園に勤務し、外国人幼児を担当する女性のA先生

質問項目：担当する外国人の子どもの保育や支援で心掛けていること、保護者への対応で心がけていること、等。

分析手順：インタビューは、協力者に許可を得てICレコーダで録音し、スクリプトを作成した。スクリプトを分析対象とし、担任教諭の外国人の子どもに関する支援を分類、整理して、その特徴を検討した。

2. A先生と対象児S君のプロフィール

A先生は、関東の私立幼稚園に勤務する幼稚園教諭になって5年目の先生である。これまで外国

¹ 植草学園短期大学

人の子どもを2人担当した経験がある。日本語のわからない子どもを担当したことがあるが、両親のいずれかが日本語を話すことができたため、対応に困ったことはなかった。

対象児S君（以下、S君と記す）は、フィリピン出身で、父親の仕事の関係で来日。幼稚園には年少から入園した。来日間もない入園で、当初日本語はほとんどわからない状態であった。S君の気になる行動として、年少クラスを担当した先生からは、物を見るときに顔を傾けるなど視線が気になること、突然大きな声を出すこと、1人ごとを言いながら自分の世界に入ってしまうことがあることなどが、引き継ぎ時に伝えられた。

家庭では、タガログと英語で会話しており、両親、S君ともに英語を話すことができる。母親は入園当初は専業主婦であったが、インタビュー調査時点では英語教師として働き始めていた。母親は多少であるが日本語を話すことができる。

年少で入園したS君は、年中にあがる際に、震災の関係で一時帰国し、5月に年中クラスに復園した。S君は、新しく担任になったA先生をすぐに受け入れ、園ではほぼ日本語で会話している。A先生は、S君がどこまでわかっていて、どこまでわかっていないかを手探りしながらも、インタビュー調査時の7月には製作の説明などS君が「ちゃんとわかってるんだ」と思うことも多くなっていた。いつもと違うこと、初めてのことには戸惑うことも多いS君であったが、毎日行う所持品の始末や出欠のお返事などは、自分でできるようになっていた。

Ⅲ. 結果と考察

1. A先生の「つなぐ・つながる支援」

スクリプトの中から、A先生のS君の支援に関する箇所を意味ごとに切り出し、分類、整理したところ14の支援に分類された。14の支援の具体的な内容を検討し、「S君への支援」「S君とクラスの子どもをつなぐ支援」「S君の母親への支援」の3つの支援カテゴリを見出した。3つの支援カテゴリ及び14の支援とその具体的な内容を表1にまとめた。

ここでは、3つの支援カテゴリを「つなぐ・つながる支援」という観点から分析する。「つなぐ・

つながる支援」とは、A先生の支援を特徴づけるものであると考えたからである。「つなぐ支援」とは、S君が活動に参加できるように、S君と活動をつないだり、S君とクラスの子どもをつないだりする支援である。「つながる支援」とは、S君やS君の母親と信頼関係を築くために、自分から話しかけたり、1対1で関わったり、個別に話しかけたりすることである。そして、「つなぐ・つながる支援」とは、信頼関係を築きながら、活動につなげる支援を指す。

(1) S君への支援

スクリプトから、A先生のS君への支援として、「S君と一緒に行動する」「S君に個人的に話す」「S君に実物や絵を見せて説明する」「S君と1対1で関わる」「S君の理解を確認する」「S君の立場に立った支援をする」の6つが見出された。

この6つの支援を「つなぐ支援」「つながる支援」「つなぐ・つながる支援」に分けて検討する。

1) S君を活動に「つなぐ支援」

「S君に物・絵・遊びを見せて説明する」支援は、S君を活動につなぐ支援であると考えられる。

お外で使ってるおもちゃをみんなで洗って、お掃除したんですけど、学期末に。その時も、多分、お話だけでも、S君わからないだろうな、っていうふうに思って。(中略) 私が一方的に、「おもちゃ洗いに行くよー、みんなできれいにしようねー」って言っても、わからないだろうなって、思うんですけど。シャベルの絵とバケツの絵を出して、ゴシゴシゴシゴシやってやるからねって言うと、わかるっていうか。(中略) 見てもらって、説明するとわかる。[インタビュー1]

[インタビュー1]では、学期末のお掃除をする時に、A先生が「お話ただけではわからないだろうな」と思って、シャベルやバケツの絵を見せ、実際に何を洗うのかを説明している。A先生は、このように実物や絵を見せながら説明することによって、S君がお掃除に参加できるように支援していた。

表 1 A先生の支援

支援カテゴリ	支援	具体的な内容
S君への支援	S君と一緒に行動する	S君と一緒に所持品の始末をしたり、S君が何をしたらよいかわからない時や苦手な活動の時に、一緒に行動すること。
	S君に実物・絵・遊びを見せて説明する	S君に実物や絵を見せたり、遊びをやってみせて、活動内容やこれからすること・遊びのルールを説明すること。
	S君と1対1で関わる	S君と絵を書いたり、本を読んだり、1対1で関わること。
	S君の理解を確認する	活動や歌の説明をするときにクラス全体に説明したあとに、S君にもう一度個人的に話しかけS君が説明内容を理解したかどうか確認すること。
	S君の立場に立った対応をする	S君が活動から外れた時に、S君の立場に立ってS君の行動を捉え、許容すること。
S君とクラスの子どもをつなぐ支援	S君とクラスの子どもの間に入って一緒に遊ぶ	S君とクラスの子どもの関わりが増えるように、A先生がS君とクラスの子どもを仲介しながら一緒に遊ぶこと。
	S君の気持ちを代弁する	S君が自分の気持ちをうまくクラスの子どもに伝えられない時に、A先生がS君の気持ちを代わりにクラスの子どもに伝えること。
	クラスの子どもたちにS君の説明をする	S君の得意なこと、苦手なこと、助けてあげてほしいことをクラスの子どもに話すこと。
	S君の活躍場面を設定する	活動の中で、S君の得意なことがアピールできる機会を設けること。
S君の母親への支援	A先生から関わる	A先生からS君の母親に話しかけたり、連絡を取ること。細かい連絡やわかりづらい連絡は通訳をしてくれる保護者を通して、S君の母親に伝わるように努力すること。
	通訳してくれる保護者を見つける	年長クラスのフィリピン出身の母親や隣のクラス、同じクラスの保護者の中で通訳してくれる人を探し、依頼すること。
	S君の母親の心配に寄り添う	S君の母親の心配なこと・気持ちを理解すること。
	S君の園での様子を伝える	S君の園での様子やできるようになったことを話すこと。
	S君の母親と他の保護者をつなげる	S君の母親とコミュニケーションを取っている保護者を見つけ、S君の母親と知り合うきっかけを作ること。

2) S君と信頼関係を築くー「つながる支援」

次に、「S君と1対1で関わる」「S君の立場に立った対応をする」という支援は、A先生がS君と信頼関係を築くための「つながる支援」であると考えられる。

ビデオも、みんなお部屋で、テレビの前で見ているじゃないですか。S君だけ、廊下の窓から、こうやって見てるときがあったんですね。「あれ、S君中入りなよ」って言ったんですけど。「うん」

みたいな、感じで。S君の目線で見たらすごいよく見えるんです、そこが。「ここよく見えるんだー」って言って、じゃ「ここでいいよ」って言って。[インタビュー2]

[インタビュー2]では、みんなでお部屋でビデオを見ていると、S君だけが廊下に出て、廊下の外から窓越しにビデオを見ている。そこで、A先生は、S君のところへ行き、S君の視線からテレビの見え方を確認し、「ここよく見えるんだ」

とS君に共感し、そのまま廊下からビデオを見ることを許容していた。このような「つながる支援」の積み重ねが、A先生とS君の信頼関係を築くことにつながっていったと思われる。

3) S君と信頼関係を築きながら活動につなげる ー 「つなぐ・つながる支援」

A先生の「S君と一緒に行動する」「S君の理解を確認する」支援は、S君と信頼関係を築きながら活動につなげる支援、すなわち「つなぐ・つながる支援」であると考えられた。

最初は、私が一緒に手をつないで、所持品の始末、まず帽子、上靴をはいて、帽子を脱いで、リュックをかけに行ったら、シール帳をとって、毎日シールを貼るんだよっていうのを、毎日私と一緒にやったんですけど、今は全然自分でやって。[インタビュー3]

何かちょっと話したあとに、「S君大丈夫？わかる？OK？」って必ず確かめるようにしているとか。[インタビュー4]

[インタビュー3]では、年中クラスに上がった当初、所持品の始末をA先生がS君と一緒にしていた様子が語られている。A先生がS君と一緒に行動することにより、A先生はS君と関係を築きながら、S君が所持品の始末を自分でできるように支援していた。

[インタビュー4]では、A先生がクラスのみんなにお話をしたあとに、S君が理解できているか確認することを心がけていることがわかる。このようにみんなにお話したあとに、S君に個人的に話しかけ、お話の内容がわかっているかを確認するという支援は、S君にとって、A先生は常に自分を気にかけてくれるというメタ・メッセージとなったと思われる。同時に、S君がお話の内容を理解することができることで、次の活動へつなげる支援となっていた。

4) A先生とS君の関係

A先生のS君への「つなぐ・つながる支援」によっ

て、S君はA先生を信頼し、頼りにするようになっていた。

S君に個人的に伝えてあげたほうがいいと思うことは伝えるんですけど「うん？」ってわからなくても、雰囲気は安心してるといって、先生がいるってだけでちょっと安心感が見られるっていか。顔が柔らかくなる感じがあります。[インタビュー5]

困ったときは、意外と呼んでくれるんですよ。「A先生、ちょっと来て」って言うんですよ。手を持って、私を連れて行くんですね、そこまで。なので、困ったときは言ってくれるっていうふうに私も思っちゃってるんですけど。[インタビュー6]

[インタビュー5][インタビュー6]から、S君がA先生を信頼し、頼りにしている様子がわかる。このような「困ったときには言ってくれる」関係を築くことができたのもA先生の「つなぐ・つながる支援」の積み重ねによるものであったと思われる。

(2) S君とクラスの子どもをつなぐ支援

1) S君とクラスの子どもを「つなぐ支援」の分析

次に、A先生のS君とクラスの子どもをつなぐ支援を見ていく。A先生は、S君とクラスの子どものたちとの関わりを増やしてほしいと願い、「S君とクラスの子どもの間に入って一緒に遊ぶ」「S君の気持ちを代弁する」「クラスの子どもたちにS君の説明をする」「S君が活躍する場面を設定する」の4つの支援を行っていた。4つの支援についてのインタビューの抜粋を以下にあげる。

〈S君とクラスの子どもの間に入って一緒に遊ぶ〉

お友達との関わりもちょっと増やして欲しいので、間に入って一緒に遊ぶとかっていうのはするようにしています。(中略) S君は、自転車大好きで、本当に。お外遊びが好きで、お外にすぐ出て自転車に乗るんですけど、自転車だとど

うしても1人で回ることになっちゃう。1人で遊んでいるような感じになってはしまうんですけど。私も自転車に乗って、他に自転車に乗っている子と一緒に、「ドライブだー」って一緒に走ってみたりとか。あえて、「S君のとこ行こう！」って、S君のとこに行ったりとか。ちょっとなんかS君を絡めて。[インタビュー7]

〈S君の気持ちを代弁する〉

お友達の乗っている自転車を貸してほしいときに、自分で上手く言えなくて、私を連れてって「A先生、自転車ー」って言って、連れてって。「あー、これ乗りたいんだ」って。S君も一生懸命私に伝えようとするんですね。「あー、これ乗りたいの？」って言って、私が間に入ってS君の気持ちを伝えてあげるとか。[インタビュー8]

〈クラスの子どもたちにS君の説明をする〉

子どもたちにもS君が来る前に、よくお話しして。S君とクラスが違ってたお友達にも、こういうお友達で、英語が得意なんだよ、とか言って。ちょっと日本語が難しいから、困ったことがあったらみんなで助けてあげようね、っていうお話を、S君が来る前にお話したので。子どもたちも、すんなりだった感じがします。[インタビュー9]

〈S君が活躍する場面を設定する〉

みんなでフルーツバスケットやったときに、みんなも初めてだったんですけど、S君も初めてだったんですけど。S君にみんなの前ですけど、「これなに? English!」「Peach」とか。「日本語だと、桃ー」って、みんなも一緒になって。「じゃこれは? English」って聞いて。S君、全部英語でみんなに教えてくれて。(中略)じゃあ、英語でも日本語でもいいよっていうことにしてみんなでフルーツバスケットしたりとかしたときも、楽しんでやってましたね。[インタビュー10]

[インタビュー7]では、S君とクラスの子どもの間に入って遊ぶことで、S君とクラスの子どもの関わりを増やしたいというA先生の願いがわかる。また、[インタビュー8]では、A先生

がクラスの子どもに対してS君の気持ちを代弁して、S君とクラスの子どもの交渉の仲介をしている。[インタビュー9]は、年中クラスに上がるにあたって、一時帰国していたS君が復園する前に、クラスの子どもたちにS君の説明をしている様子である。S君は英語が得意であること、日本語が難しいこと、困ったことがあったらみんなを助けてほしいことを話している。S君が復園する前にお話したことによって、年少クラスではS君とクラスが違った子どもたちも「すんなり」とS君を迎えることができた。これらの支援はいずれもS君とクラスの子どもたちを「つなぐ支援」であると考えられる。

2) S君とクラスの子どもたちの関係

A先生は、S君がクラスの子に溶け込めるように、またクラスの子がS君を受け入れられるように、A先生は両者をつなぐ支援を行っていたが、S君とクラスの子どもたちはまだまだ仲の良い友達関係を築くまでには至っていなかった。

自分からとか、友達から「S君、S君、遊ぼう！」っていうのは、ちょっとまだないですね。[インタビュー11]

一方で、年少クラスからS君と同じクラスだった子どもたちの中には少しずつ、S君をお世話する子も見られるようになった。

S君が困っていると、例えば、「おトイレに行ってから、リュックを取ってきてね」ってこう、2つ言ったりすると、わかんなかったりして、S君止まったりするので。そうするとお友達のほうから、男の子とかお友達のほうから「S君! トイレだよ」とかって言ってくれたりとか。で、S君トイレ行ったりとか。「リュックだよー」ってお友達が教えてくれて、一緒に手を引っ張ってくれたりとか。ちょっとお世話好きの子も増えてきて。[インタビュー12]

年中になって、お世話好きの子どもたちも増え、「お世話をする」という関わり方で、S君とクラ

スの子どもたちの関わりができ始めていることがわかる。

(3) A先生とS君の母親

A先生はS君の母親に対して「A先生から関わる」「通訳してくれる保護者を見つける」「S君の母親の心配に寄り添う」「S君の園での様子を伝える」「Sくんの母親と他の保護者をつなぐ」の4つの支援を行なっていると考えられた。

1) S君の母親との関係づくり

－「まず私がトライします」

A先生は、S君の母親と英単語を交えながら「ハートで」話していた。そして、A先生がS君の母親と関わる時に心がけていたのは、「A先生から関わること」であった。

私もがんばるんですけど。S君のお母さんもよくわからないし、私もよくわからないまま、もう、何かハートでしゃべってるって感じですよ、いつも。[インタビュー 13]

降園後に、S君のお母さんにお伝えしたいときは、電子辞書を持って、S君のママのところに行ってお話させていただくんですけど。どうしても通じないときは、(通訳をしてくださる)お母さんをお呼んだりとか。隣のクラスにもちょっと英語ができるお母さんがいらっしゃるの、助けを借りて。[インタビュー 14]

[インタビュー 13]からは、A先生が模索しながら何とかS君の母親とコミュニケーションをとろうとしている様子が伝わる。[インタビュー 14]では、降園の時に、A先生がS君の母親のところに行き、最初は電子辞書を使って連絡を伝えようとしたり、通訳をしてくださる保護者の方の力を借りて伝えようとしたりする様子がわかる。A先生は、S君の母親と関わる際には、「まず私がトライします」と語るように、自分から関わり、様々な方法を使ってS君の母親に連絡を伝えようと努力していた。このような「A先生から関わる」支援とは、S君の母親とA先生の関係づくりそのも

のであった。

A先生はS君の母親の心配に寄り添い、S君の園での様子を何とか伝えようとも試みていた。

いつもお母さんが言うのは、「S君大丈夫ですか？」って、必ず聞きます。私と話をしたときは、必ず「S君大丈夫ですか？」って、ママは聞いてくので、「大丈夫ですよ」って、いつも。「がんばってます」っていつも言ってます。[インタビュー 15]

(ダンスが苦手なS君が)盆踊りをやったときも、ダンスしましたよ、とか。(中略)お母さん、それでわかってくださっているとは思っているんですけど。「あー」なんて言って、ニコニコして喜んでくださったりとか。[インタビュー 16]

[インタビュー 15]では、S君の母親が、幼稚園でのS君のことを心配していること、そしてA先生がそのことを理解した上で、S君の母親の心配をやわらげるようにS君がクラスでがんばっていることを伝えている。[インタビュー 16]では、ダンスが苦手になかなか踊りたがらないS君が、夕涼み会の盆踊りの練習をしたときに、盆踊りができた様子を伝えている。このような、S君の母親の心配に寄り添い、S君の園での様子やできるようになったことを伝えるA先生の支援は、A先生がS君の母親と関係をつくる「つながる支援」であったと考えられる。

2) S君の母親と通訳してくれる保護者を「つなぐ」

年中クラスに上がってすぐに、A先生はS君の母親と自分の間の通訳をしてくれる保護者を見つける努力をしていた。

S君のお母さんとお話しているのを見て、「あれ、もしかして、英語できますか？」っていうふうに、私から。最初、お隣のクラスのお母さんを見つけて、お話をされているのを見て、もしかして(英語)できますか？って。(中略)私からスカウトしに行きました。[インタビュー 17]

(英語が) できる方を探したというか、いくださったらいいなと思って。S君のお母さんにとっても、すごくいいなと思って。[インタビュー 18]

[インタビュー 17]から、A先生がS君の母親と話す保護者を見つけると、A先生から通訳をしてくれないか「スカウト」している様子がわかる。当初、年長クラスには、フィリピン出身の母親が数人いるため、通訳を依頼していた。しかし、年長クラスと年中クラスでは降園時間が異なり日々の細々とした連絡をするのに不都合なことから、2つある年中クラスの保護者の中から通訳をしてくれる方を探すなど、実情に柔軟に対応しながら、S君の母親の通訳をしてくれる保護者を見つけていた。通訳をしてくれる保護者を隣のクラスに1名、同じクラスに1名見つけ、「細かい連絡とかわかりづらい連絡」は、その保護者を通じて連絡していた。このようなA先生の支援は、S君の母親と通訳者をつなぐだけでなく、通訳者を通して細かな連絡をすることができることで、S君の母親と幼稚園をつなぐ支援でもある。

[インタビュー 18]からは、A先生が、保護者の中から通訳者を探す時に、単に通訳してくださる方を求めるだけでなく、S君の母親と他の保護者とのつながりも意識していることが窺われる。

3) A先生とS君の母親の関係

ー「何かあったら言ってくださる」

A先生のS君の母親への支援の結果、A先生とS君の母親は、「何かあったら言ってくださる」関係を築いていた。

お話をさせていただいているので、何かあったら言ってくださるような気がしてるんですけど。[インタビュー 19]

このような「何かあったら言ってくださる」関係とは、A先生とS君の母親との間で、「伝わらないことは、たくさん」ありながらも、S君の母親はいざという時にはA先生が力になってくれるとわかっていること、A先生はS君の母親が何か困ったことや帰国などの大きな決断をするときには、

自分に話してくれると信じている、という関係である。このような信頼関係を築くことができたのも、日常的にA先生からS君の母親に関わろうとし、保護者の中から通訳者を見つけ、S君の母親の不安に寄り添いながら、園でのS君の様子を手振り身振り、簡単な英単語でも伝えようとする、A先生のS君の母親に対する「つなぐ・つながる支援」があったからだと考えられる。

2. A先生の支援の背景

A先生の支援の背景を(1) 前任者からの引き継ぎと、(2) 年少クラスの経験、の2つから検討する。

(1) 前任者からの引き継ぎ

A先生は、S君についてS君の気になる行動、S君の母親の日本語能力とS君の母親の通訳者について前任者から引き継いでいた。それに加えて、A先生は、S君の支援に困った時に、前任者に前年度のS君の様子を聞き、支援に生かすことがあった。このようにS君やS君の保護者に関する細かな情報と年度途中の漸次的な引き継ぎによってA先生は、S君に関する情報を集めることができ、支援に生かしていた。引き継ぎが支援に生かされた例をみていく。

(S君の) 気になることを聞いていたので、良かったかなと思います。あの、こういう目の話(筆者注：S君は、物を見るときに顔を傾けて見ることがある)とか聞いていたので、良かったっていうのは、たくさん。(中略)「キャー」っていう話とか聞いていたので、私も、これが、っていう。心構えじゃないですけど、だいぶ違ったと思います。[インタビュー 20]

最初だけ嫌がって。乾布のとき。最初、私もわからなかったの、脱ぐのが嫌なのかな?と思って、脱がないでやってもらいました。年少の先生に、「年少のときどうでしたか?」って聞いたら、「やってた」っていうんで、じゃ、脱げるんじゃないかって。2回目から、一緒について脱ぎました。で、それからはもう全然大丈夫で。[インタビュー 21]

A先生は、S君の気になる行動として、顔を傾けながら物を見ること、大きな音が嫌いで皆で歌っているときに「キャー」と大きな声を出すことなどを年少時の担任の先生から聞いていた。そのため、S君の気になる行動を目の当たりにしても「心構え」ができ、特に注意することはなく見守っていた。

また、S君が、乾布摩擦をするときに服を脱ぐのを嫌がったときには、最初は無理に服を脱がせないという対応をし、年少クラスの担任の先生に昨年度の様子を聞いている。そこで、年少時には服を脱いで乾布摩擦をしていたということ聞き、一緒に付き添いながら服を脱ぎ乾布摩擦をするという支援を行っていた[インタビュー 21]。

S君の気になる行動を年少クラスの担任から引き継いでいたからこそ、A先生はS君の行動に対して「心構え」ができ、S君がそのような行動を見せた時に、すぐにその行動を止めようとするのではなく、S君の行動を見守るという支援につながったと思われる。引き継ぎは、どのような時にそのような行動をするのか、どこまでできてどこからはできないのかを考える際のヒントになり、支援に幅や余裕を生み出していたと考えられる。

(2) 年少クラスの経験

S君は、年少で幼稚園に入園し、調査時点では年中であった。そのため、年少クラスでの1年間の経験もA先生の支援に影響を与えたと思われる。

〈S君の成長：誕生会のインタビュー〉

誕生会のインタビューで、「遠足が一番楽しかったことは何ですか？」って聞いたんですね。私、全然英語に訳さずに、他の子と同じように、インタビューしていったら、「カピバラ、カピバラとペンギン」って言ったんですね。すごい、お返事とかもすごく上手なので、お名前教えてくださいって、「Sです」って、大きな声ではっきり言ってくれて、「何組ですか?」「**組です」って、ちゃんと言ってくれて。インタビューの内容もすごくしっかりしていて。[インタビュー 22]

〈S君の母親の行事への理解〉

1回やってるっていうのもありますね。だいたいのは。お誕生会とか。S君5月がお誕生日だったんですけど、お誕生会とかお母さんに来ていただいたりとか、色々あるんですけど。それも、「お誕生会、お願いします」って言うだけで、去年1回経験されているから、わかってたりとか。[インタビュー 23]

〈S君を自然に受け入れるクラスの子どもたち〉

みんな年少から知っている子もほとんどなので、みんな自然に受け入れていました。[インタビュー 24]

誕生会のインタビューで、S君は通訳を介さずに、日本語の質問に日本語で答えている。S君の在籍する幼稚園では、毎月、降園の時に、お迎えに来た保護者の前で誕生月の子どもたちにインタビューする、という誕生会を行っている。[インタビュー 22]では、5月に復園したS君が、4月の誕生会を経験していなかったにも関わらず、5月の誕生会で大勢の保護者の前でインタビューに答えることができています。これも、年少クラスで誕生会を1度経験していたからこそ、誕生会がどのようなものであるか、インタビューではどのようなことを聞かれ、どのように答えたらよいか分かっていたために、インタビューに答えることができたと思われる。

また、S君の母親も年少クラスでの経験があったため、A先生からの「お誕生会、お願いします」という言葉だけで、何が行われるのか理解できたと思われる。

年少クラスで、S君と同じクラスだった子どもたちも、年少クラスの1年間でS君のことを知っていたことにより、年中にあがり、クラスが変わってもS君を自然に受け入れることができたと思われる。

このように年少クラスの経験がA先生の支援に影響を与えている。そして、年少クラスの経験をA先生の支援につなげることができたのは、前年度からの引き継ぎや年度の途中での漸次的な引き継ぎがあったからであると思われる。

Ⅳ. 本稿の限界と今後の課題

本稿は、担任教諭1名を対象としたインタビュー調査であり、対象児も1名であることから一般化には限界がある。今後は、担任教諭へのインタビュー調査を重ねることで、「つなぐ・つながる支援」の概念を精緻化することが課題である。また、対象児は幼稚園に入園して2年目であったため、1年目の担任教諭はどのような支援を行っているのか、また、1クラスに複数の外国人の子どもが在籍していた場合に、担任教諭はどのような支援をしているのか、研究を重ねる必要がある。

参考文献

- 1) 文部科学省,2012,学校基本調査
- 2) 日本保育協会,2011,『保育の国際化に関する調査研究報告書－平成20年度－

- 3) 大場幸夫・民秋言・中田カヨ子・久富陽子,1998,『外国人の子どもの保育』,萌文書林
- 4) 田辺繁治,2003,『生き方の人類学－実践とは何か－』講談社現代新書

謝 辞

お忙しい中インタビュー調査にご協力くださいましたA先生に感謝いたします。また、幼稚園での観察を許可してくださった先生方、S君とS君のクラスの子どもたちに感謝いたします。

本研究は、平成22～23年度植草学園大学共同研究「インクルーシブ保育の充実をもたらす促進要因に関する実際的研究」(代表：植草学園大学 太田俊己)による助成を受けました。